

総説特集：食べ物のおいしさ 1

緒 言*

荒 井 綜 一**

(東京農業大学・農学部・栄養学科)

食べ物にはいろいろの属性があるが、そのなかで食べ物らしさを最も端的に示すのはおいしさであろう。このことはいつの時代でもどこの社会でも変らぬ真理であるように思える。

食べ物の重要な属性のひとつに栄養価がある。しかしこれは食べ物に固有のものではない。最近では、病気の予防の助けになる食べ物（機能性食品）に対して、世界各国が強い学術的、行政的、社会的関心を寄せていて、食品の分野にひとつの新しい流れを形成する勢いである。が、限りなく医薬品に近いこの新食品の登場は、皮肉にも、かえって食べ物のおいしさの重要性を再認識させる結果になり、新たな視点からの味覚・嗅覚の研究を誘なうことともなった。

味覚・嗅覚は、口や鼻での味物質・匂物質の受容（reception）がきっかけになって生じる感覚である。これに対しておいしさは、脳における味覚・嗅覚の受諾（acceptation）の結果生じる知覚（すなわち日常生活における適応行動）であり、その一部は心理物理学（psychophysics）の領域に入る。したがって、英語ではおいしさを acceptability（受諾性）と表現し、そのデータを psychophysical data などと呼ぶ。

おいしさ（受諾性）に寄与するのは味や匂いばかりではない。食べ物のテクスチャー、温度、外観、手ざわり、さらには食べているときの音なども寄与している。要するに、私たちは、食べ物のこうした多様な因子（表1）によって誘起される味覚、嗅覚、触覚、温覚、視覚、聴覚を総動員して、おいしさと

いう知覚を築き上げ、そうして食べ物を受諾するわけである。

呼応して、おいしさの研究の方法も多様になる。従来、物理、化学、生化学は食品という“物”の面からのおいしさの研究に貢献してきた。機器分析技術の進歩がこれに拍車をかけたのも事実である。最近登場したバイオサイエンスとりわけ細胞生物学・分子生物学、そしてバイオテクノロジーとりわけ細

表1 食べ物のおいしさ（受諾性）に寄与する因子

感覚を誘起する因子	誘起される感覚
味 [基本味 ^a その他の味 ^b	味 覚
匂 い	嗅 覚
テクスチャー	触 覚 ^c
温 度	温 覚 ^d
色・形	視 覚
手ざわり	触 覚
音・響	聴 覚

^a 甘味、酸味、塩味、苦味、うま味

^b 渋味、辛味、えぐ味など

^c 舌ざわり、かみ心地など

^d 温感、冷感など

*Received April 27, 1997 ; Accepted April 28, 1997.

Introduction to the special issue on food acceptability.

**Soichi Arai : Department of Nutrition, Tokyo University of Agriculture, 1-1-1 Sakura-ga-oka, Setagaya, Tokyo 156, Japan

胞工学・遺伝子工学は、いわゆるバイオ食品さらにはクローン生物の創出を可能とし、新しい観点からのおいしい“物”の開発に途を拓こうとしている。が、一方、こうした先端のサイエンスとテクノロジーは、“物”の面からばかりでなく、それを食べる人間の面、つまり“体”の面からみたおいしさの研究に新たな方向を示唆している。21世紀の最大の研究対象である脳の科学の一端を担うであろう感覚と知覚の分子論の誕生は、その一例であろう。

そればかりではない。脳の科学から心の科学への展開が期待される来世紀には、おいしさの研究はそ

の重要な一部になるとさえ思えるのである。というのも、おいしさに関与する色・味・香り等々の感覚因子(表1)を敷衍すると、そこには心理的要因が少なからず介入すると考えられるからである。

その意味で、“食べ物のおいしさ”を主題とする本特集に、“物”の面からのみならず、“体”とりわけ脳と心の面からの話題が含まれることは大変意義深い。この特集の基礎となった「うま味研究会主催のシンポジウム」(東京にて平成9年3月21日)がその範囲を“うま味”に限定せず、“おいしさ”にまで拡大されたことに感謝申し上げる次第である。

<著者紹介>

荒井綜一氏略歴

昭和34年 3月 東京大学農学部卒業
 昭和34年 4月 森永製菓株式会社入社
 昭和39年 4月 東京大学大学院化学系研究科農芸化学専攻修士課程入学
 昭和42年 6月 東京大学農学部助手
 昭和53年 3月 東京大学農学部助教授
 平成3年 4月～ 日本味と匂学会運営委員
 平成9年 3月
 平成3年 7月 東京大学農学部教授
 平成6年 4月 東京大学大学院農学生命科学研究科教授
 平成8年 3月 東京大学定年退官
 平成9年 4月 東京農業大学農学部教授

